



学校だより

平成29年8月31日
横浜市立豊田小学校
9月号

豊田小学校ホームページアドレス <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/toyoda/>

夏の読書

校長 瀬尾芳保

コスモスの白やピンクの花が風に揺れて、夏の終わりをを感じる季節になりました。休み中はしんと静かだった学校にも、子どもたちの元気な声が戻り、急に活気が感じられるようになりました。

子どもたちはそれぞれの家庭で38日を過ごし、一回り大きくなって登校してきました。

さて、私はこの夏休み何冊かの本を読みました。その中で子どもたちにも読める、読んで欲しい本があったので紹介したいと思います。

その本は「ぼくたちのリアル」 戸森しるこ作 講談社 です。小学校5年生の主人公「アスカ」が幼なじみの「リアル」、転入生の「サジ」との間で経験する5ヶ月間の成長の物語です。

5年生の子どもたちが、それぞれに違った背景をもちながら友達を思い、友達を理解しようと苦しむ中で、自分自身の思いに気づき、少しずつ大人になっていく姿を描いています。友達と、周りの大人たちと時には衝突し、それでも真剣に向き合ってお互いの思いをぶつけ合いながら、その思いを受け止めていく心の変化が、とても読みやすい文章で書かれています。

例えば次のような一説です。『でもさ、あのときのリアルも、いまのサジも、自分以外のだれかのために必死になっている。ぼくはいつも自分のことを一番に考えてしまうから、そういうとき、ホントにすげえなって思う。』というところからは、主人公が友達をととてもよく見ていて、自分のことも客観的に見ていることが感じられます。また、『サジのその考え方は、僕たちにとってはとても新鮮だった。リアルが

かかえつづけてきた、そしてぼくが逃げつづけてきた、答えの出ないむずかしいその問題に、サジはそんなふうになぐさめを与えてくれた。』という文章からは、自分のことだけでなく、友達の感じ方やその友達とのつながりが変化していくことに対する感性を感じます。そして、『きみの大切な気持ちを、ぼくたちはずっとずっとわすれられない。』という、子どもたちの成長と未来への希望を感じるラストになっています。

これから子どもたちみんなが、出会い方は違っても、友達や自分の思い、それぞれの生き方を見つけていくときの、誰にも当てはまりそうな物語が描かれていると感じました。

自分ではうまく言葉にできないけれど、なんとなくもやもやと感じていることを、自分の代わりに登場人物が語ってくれました。また、物語の中に自分にとって大切な「本当のこと」が書かれているのを見つけることができました。心が成長するとはどんなことだろう、と改めて考えるきっかけにもなりました。

こんな経験ができるのが、読書の最高の楽しみです。皆さんもぜひ、「ぼくたちのリアル」手に取ってみてはいかがですか。

この本は、今年の青少年読書感想文全国コンクール 高学年の部課題図書です。

「読んだよ」という人はぜひ感想を聞かせてください。自分とは違った感想を聞けるのを楽しみにしています。

中学年の部の課題図書、「耳の聞こえないメジャーリーガー ウィリアム・ホイ」もおすすめの一冊です。